

九州大学総合研究 博物館ニュース

November 2008 No.11

旧工学部本館3階に常設展示室を開設

多田内修



九州大学には、2000年のアンケート調査によれば、学内各部局に740万点を越える学術標本・資料が分散して保管されています。これらの標本・資料は、国内の大学では随一の規模を誇り、長年にわたり九州大学の教育と研究を支えてきましたが、今後更に新たな共同研究や学際的な研究の出発点となる可能性を秘めています。

2000年4月に創設された九州大学総合研究博物館は、新キャンパス移転後に博物館の建物を造る計画ですが、当面は箱崎キャンパスで活動を行っていきます。今回、旧工学部本館3階の第9番講義室を改修し、常設展示室を開設し公開いたしました。開学記念日に合わせて、平成20年5月8日には梶山千里九州大学総長および全理事の出席のもと、常設展示室の開設セレモニーを行いました。また、同時期には、日頃公開していない、旧工学部本館4階第二会議室では青山熊治画伯の壁画、50周年記念講堂3階では平山平次郎先生考古学資料、博物館第一分館では古人骨標本・脊椎動物骨格標本、鉱物標本等の一般公開も行いました。

今回開設した常設展示室（開設時間：平日の10時～16時30分）では、学内各部局および総合研究博物館に収蔵されている標本・資料の中から考古学資料、記録史料、化石標本、岩石・鉱物標本、動植物標本、昆虫標本、技術史資料から特に貴重で興味深い、教育効果の高い標本・資料類を選んで展示を行っています。また、各部局に収蔵されている標本・資料類の概説ポスターの展示も行い、これらが学内収蔵コレクションのナビゲーションとなり、今後の新たな研究へのアイデアを提供する材料となれば幸いに思います。平成20年度には、常設展示室を利用して芸術工学部の演習授業が始まりました。今後関連学部の授業等での活用をさらに増やしていきたいと考えています。

大学で学ぶ人、働く人、大学博物館を訪れた人たちが、学術標本・資料という大学の知的財産に触れて感動し、知的好奇心をかき立てられることを心から願います。

（総合研究博物館 館長 専門：昆虫学）

常設展示室へようこそ:その1 「九大博物館標本かるた」うらばなし

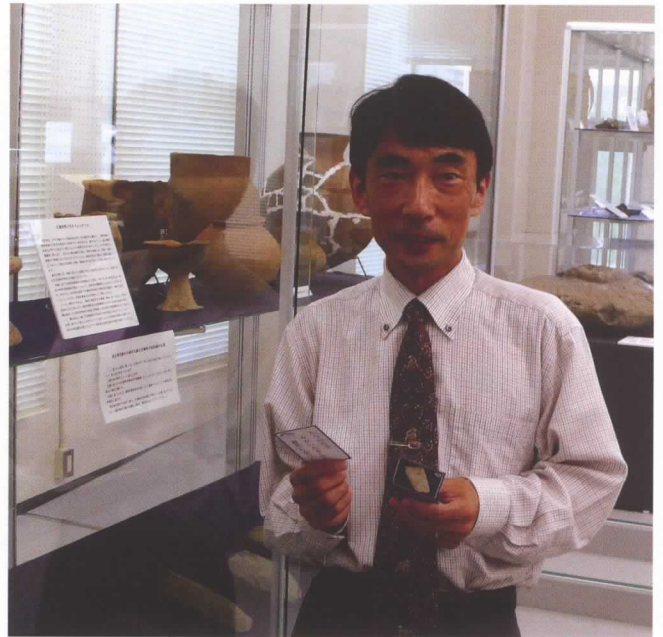
三島美佐子

この春から、新しい常設展示室がオープンしています。この常設展示室では、学内にある標本資料からまんべんなく選んだものを、少しずつ展示しています。部屋自体の改装は業者さんをお願いしましたが、物の配置やパネルなどは、館の教職員による手作りです。「常設展示室へようこそ」では、この常設展示室にまつわる話題を、シリーズでおおくりします。

さて、新展示室の展示物につけている解説も、博物館教員が、担当コーナーごとに、それぞれ別々に作ったものです。そうすると、難しいものからやさしいものまで、いろいろになってきます。もちろん、書いている教員たちは、「できるだけやさしく、わかりやすく」を心がけて解説を作ります。それでも難しくなってしまうのが、大学の先生の性(さが)とでもいいでしょうか。今回の展示は、高校生以上で、専門外の人を対象に作られていますが、私がみても「うーむ・・・」とうなってしまうくらい、長くて難しいと感じる解説もあります。

そんな展示室に、7月、大勢の子供たちがやってくることになりました。「科学の公園」という団体が箱崎キャンパスで行う、子供むけの科学イベントのさい、博物館の常設展示室も土日臨時オープンすることになったからです。せっかく来てもらうのですから、子供たちにも楽しんでもらいたいし、本物の学術資料をみちかんに感じてほしいと思うのが親(?)心。そこで、子供向けの解説をどうするか、ということになりました。

解説を子供向けに作り直すにも十分な時間がなく、またそ



担当した考古資料コーナーとその解説を横に、「え?そんなに難しい?すぐく簡単にしたんだけど。」と微笑む岩永先生(考古学のご専門)。

れができたとしても、展示ケースには、うまく置けるスペースがありません。この大問題(?)を解決すべく、「P&P研究チーム」でアイデアを練ることになりました。このチームは、去年から九大内の研究経費(P&P)の補助をうけてはじまった「九大博物館展示室を活用した実践的研究」によるもので、博物館



完成した「九大博物館標本かるた」。上にあるのは、常設展示室の今の展示の配置図で、今回のシリーズのカバーです。どこにどの札があるかがわかるようになっています。

